大通結縁の第三類について

最上泰滉

はじめに

日蓮聖人の遺文において、「大通結縁の第三類の在世をもれた」という表記は、直接的には『開目抄』（定遺五五六頁B）においてのみ見られる用例であるが、内容的には『観心本尊抄』、『曽谷入道殿許御書』等にも窺える。[1] とくに『曽谷入道殿許御書』（定遺八九七頁A）では、末法の衆生を釈尊在世の結縁をもれた「本未有善」の存在としており、「大通結縁の第三類」の解釈は、下種論において重要な意義を有すると思われる。[2]

また『開目抄』の叙述には日蓮聖人の罪業観が集約されており、日蓮聖人の罪意識を知る上でも、等閑視できない問題である。

そこで本稿では、『注法華経』第三巻化城喩品の行間に注記された諸文を検討することにより、「大通結縁の第三類」、さらには「第三類の在世をもれた」衆生について、日蓮聖人が如何に受けとめられたのか、その認識を探っていきたいと思う。

一、大通結縁の第三類

『注法華経』第三巻化城喩品の行間には、「大通結縁」「第三類」等に関すると思われる『法華文句』『法華文句記』『法華玄義』『法華玄義釈籤』等の書き入れが見られる。[3] 以下諸文を挙げ検討していきたい。

① 『法華文句』巻七下

又云。是時十六菩薩知二仏入室一下。第二正結縁。就レ此有レ二。先法説結縁。次譬説結縁。就二法説一有レ三。第一明二昔日同共結縁一。第二明二中間更相値遇一。第三明三今還於二法華一。[4]

『法華経』化城喩品は、釈尊と衆生との宿世の因縁が

説示される章である。天台大師智顗（五三八―五九七）は、「化導の始終」「種熟脱三益」が示されることから重視している。①はその化城喩品釈の文である。この①以下においては、「宿世の結縁」が説述されるが、ここでは、第一に昔日に共に結縁し、第二に中間に更に相い値遇し、第三に今還て法華を説くことを明かすとて、大通三益が示されている。

またこの次下では、大通時の下種結縁について説かれている。すなわち、三千塵点劫の昔、大通智勝仏の入定に際し、まだ熟していない衆生がいる故、第十六王子釈迦菩薩が法華を覆講し、父子の縁を結んだのであるという。天台大師は、この釈尊と結縁した衆生は必ず釈尊によって究竟し度脱を得ると説示している。

②『法華文句』巻七下

又云。仏告二比丘一是十六下。第二明二中間常相逢値一。逢値有二三種一。若相逢遇常受二大乗一。此輩中間皆已成就不レ至二于今一。若相逢遇。遇二其退レ大仍接以レ小。此輩中間猶故未レ尽。今得三還聞二大乗之教一。三但論レ遇レ小不レ論レ遇レ大。則中間未レ度于レ今亦不レ尽。方始受レ大乃至滅後得道者是也。(5)

これは先の①の「中間に更に相い逢値すること」に関し、天台大師が詳説する箇所である。大通結縁の衆生の得脱には遅速があり、それを三類に区分して説示している。すなわち、一に逢遇して常に大乗の教化を受ける輩は、中間に皆既に脱益を得、今日に至るまで流転することはない。二にもし相い逢遇するも、大乗を退転したため小乗により教化される輩は、中間に脱益を得ず、今日また還て大乗の教を聞くことを得る。三に小乗の教化のみを受容する輩は、中間において脱益を得ず、今日始めて大乗の教化を受けるのであり、これは滅後得道の者であるという。

つまり、第一類は中間脱益、第二類は今日脱益、第三類は滅後脱益を得る者と位置づけられている。第一類は釈尊在世に至るまでに、既に得脱しているので、『法華経』迹門における所対の機は、この第二類、第三類の衆生ということになる。第二類にとって釈尊在世は脱益を得る時である。これに対し第三類における釈尊在世とは、大乗の教化、すなわち法華経聞法の時であり、下種益を得る時である。したがって『開目抄』における「第三類の在世をもれたるか」とは、この釈尊在世における法華聞法（下種結縁）にももれたという認識である。

叙上から「大通結縁の第三類」とは、釈尊在世に大乗

の教化を受け、滅後に脱益を得るものである。ここでは、「方始受レ大」とて、第三類が釈尊の在世に始めて大乗の教化を受けたという箇所に着目される。

③『法華文句記』巻八之一

記七云。逢値有三種者。前二可レ知。第三既云二但論遇小一。中間之言。自望下元初結二縁一者上耳。第三類人。未二曾聞レ大便即流転。此人即以二初聞レ小時一為二初結縁一。復於二中間一唯習二於小一。今遇二王子一初且聞レ小。人見下釈迦一代教中。一分声聞未二発心一者上。便即判云二永滅無レ発。是則不レ知二如来長遠之化一。(6)

これは『文句』②の第三類の結縁に関する妙楽大師湛然（七一一―七八二）の扶釈である。ここでは、第三類とは、元初に小縁を結ぶ者をさすのであり、未だ曾て大乗（法華経）を聞かず流転し、小乗を聞いた時を以て最初の結縁と為すと説示されている。

すなわち、この第三類は釈迦菩薩の法華覆講を受けたにもかかわらず、その法華経による結縁を退け、小乗により結縁したのであり、釈尊在世に至って始めて大乗の教化を受けた衆生であると位置づけられているように思われる。

④『法華玄義』巻一上

玄一云。又異者。余教当機益物。不レ説二如来施化之意一。此経明下仏設レ教元始。巧為二衆生一作中頓・漸・不定・顕・密種子上。(7)

これは三種教相の第二「化道の始終不始終相」の文である。諸経は当機益物の教えであり、如来が教化を施す真意を説いていないが、『法華経』は仏が教化を設けた元始を明かにし、種熟脱三益の化道を説いているという。ここでは仏が衆生を教化する元始において、衆生のために巧みに方便を用いて、頓・漸・不定・秘密教の種子を作ると説かれている。

⑤『法華玄義釈籤』巻一下

籤一云。且指二迹中大通一為レ首。雖レ寄二漸及不定一不下以二余教一為ヒ種。故云二巧為一。結縁已後退レ大迷レ初故。復更於二七教之中一下二調停種一。復云二巧為一。(8)

『玄義』④の妙楽の扶釈である。ここでは、大通時釈迦菩薩が、衆生を教化する元始において、頓・漸・不定・秘密教にこと寄せて種子を下しているが、純円たる法華経以外は成仏の種子とならないのであり、下種はあくまでも法華経であると説示されている。

以上の諸文より「大通結縁の第三類」についてまとめると、次の如く解釈できよう。一、大通時釈迦菩薩の法華覆講による結縁を退け、小乗により結縁した。二、これは釈尊が衆生教化の元始において用いた方便である。三、そして第三類は、釈尊在世に至って始めて大乗の教化を受けた在世下種の者である。四、これは諸教は下種とはならず、下種はあくまで法華経によるためである。

二、良医喩における「失心者」

『注法華経』第三巻の化城喩品の行間には、先の「第三類」の他に、「失心者」「不失心者」に関する『玄義』『玄義釈籤』等の注記も見られる。[9]

⑥『法華玄義』巻六下

玄六云。飲二他毒薬一。有二失レ心者・不レ失レ心者一。不失心者。拝跪問訊求二索救護一。与レ薬即服。故於二大通覆講一。説二妙法花一得レ結二大乗文字一。其失心者。雖レ与二良薬一而不二肯服一。流二浪生死一逃二逝他国一。即起二方便一。或作二三蔵結縁一説二生滅之法一。或生二通教結縁一説二無生之法一。或作二別教結縁一説二不生々恒沙仏法一。或作二円教結縁一説二不生不生一実相法一。若信若謗。因倒因起。如二喜根雖レ謗後要得レ度。○昔汎々信順今為二疎外受道一。昔時拒謗今為二怨家受道一。[11]

これは眷属妙中「業生眷属」を明かす箇所である。天台大師は、「不失心者」を、与えられた良薬を服用する者、すなわち大通時における釈迦菩薩の法華覆講により、大乗の父子結縁をなした者と位置づけている。これに対し「失心者」とは、与えられた良薬を服用せず、生死に流浪して他国に逃逝した者である。すなわち、釈迦菩薩の法華覆講による大乗の父子結縁を退けたために、釈迦菩薩の方便により、蔵教・通教・別教・円教により結縁された者であると説示している。またこの「失心者」は、喜根菩薩を誹謗した勝意比丘と重ねられており、逆縁として位置づけられると思われる。

⑦『法華玄義釈籤』巻七上

籤六云。初文云下飲二他毒薬一失中本心上者。忘二本所受一故曰二失心一。従二本化一来迷レ真之後。起二無明惑一如レ飲二毒薬一。背二大化一為二失心一。[12]

「失心者」に関する妙楽の説示である。毒薬を飲んで本心を失うというのは、本の所受を忘れる故に「失心」であるという。この「本所受」とは、「本化」であるから久遠下種である。すなわち久遠下種より已来真実に迷

い、その後も無明の惑を起こして毒薬を飲むが如く、大化に背くことを「失心」と説示している。つまり「失心者」とは、久遠下種已来本心（仏種）を忘失し、そのため大通時の大化にも背いてきた者であると解釈できよう。

以上から、一、「不失心者」は大通時の法華覆講により大乗の父子結縁をなした者である。二、一方「失心者」は久遠下種を忘失し、その後真実に迷い大化に背いてきた者である。三、また「失心者」とは法華覆講による父子結縁を退け、法華経以外の教により結縁した者である。四、すなわち、「不失心者」とは大通結縁の第一・二類、「失心者」とは第三類と位置づけられると思われる。五、また更に「失心者」は大通結縁における逆縁として捉えることもできる。

三、繋珠喩における「重酔者」

『注法華経』第三巻化城喩品の行間には、「衣裏繋珠喩」に関する『文句』等の釈文も書き入れられている。[13]

⑧『法華文句』巻八上

文句七云。酔有二二義一。○雖レ有二二義一終成二繋珠一。如二毒鼓一耳。[14]

これは五百弟子受記品の「衣裏繋珠喩」における「酔酒」に関する釈文である。「繋珠喩」とは、二乗が過去世に大通仏十六王子釈迦菩薩によって大乗と結縁するも、無明に覆われ悟ることができず、小乗の薄徳に甘んじていたが、仏の方便開示により、一仏乗に入ることができたのを譬えたものである。すなわち、貧人（二乗）は親友（仏）の家に行き、酒（無明煩悩）に酔って眠ってしまった。そこで友人は貧人の衣の裏に宝珠（一乗法華経）を縫いつけて（結縁）去った。その後貧人はそれに気づかず貧苦に悩むが、後日友人に再会し（今番出世）衣裏の珠を知るという内容である。[15] 今前後を補うと次のようになる。

（譬如有人者。即二乗人也。親友者。昔日第十六王子也。家即大乗教為レ家也。酔酒而臥者。当二于爾時一大機暫発無明暫伏。以レ得レ聞レ経内心微解。以二無明重一故還復迷失。）酔有二二義一。（一重酔。都不二覚知一。二軽酔。微覚尋忘。亦名二不覚一。）雖レ有二二義一終成二繋珠一。如二毒鼓一耳。[16]

喩中の貧人は二乗、親友が釈迦菩薩、家は大乗の家であり、貧人が酒に酔うのに二種あるとしている。すなわち、一つには重酔で、全て覚知できない者、二には軽酔で、少しは覚知するもすぐ忘れる「微覚尋忘」の者であ

り、ともに「不覚」の者としている。酒に酔うにはこの二種があるが、結局のところこの二種とも繋珠をなしたのであり、毒鼓の様なものであると解釈している。

茂田井教亨氏によれば、日蓮聖人は、第三類がこの重酔であると解釈し、自身が重酔者たる自覚を有していたと指摘されている。[17] 化城喩品の行間に書き入れられていることから、先の第三類との関連が思考される。

ここで着目されるのは、大通時において、重酔者であっても、釈迦菩薩と結縁したと解釈できる点であり、毒鼓の如く逆縁として位置づけられていることが挙げられよう。[18]

四、『法華疏私記』における宝地坊証真の解釈

これまでの『注法華経』注記の諸文の検討から、第三類が大通時釈迦菩薩の結縁と位置づけられるか否か、という点が肯綮となるように思われる。そこで日蓮聖人の認識を探る一助として、宝地坊証真の『法華疏私記』巻七の文を挙げてみたい。証真は「第三類」について、②③を受け次のように扶釈している。

文但論遇小不論遇大等者。問。此第三類為二是王子結縁者一不。若結縁者。何云三但論二遇小一。又云第三類人未二曾聞一レ大。初聞レ小時為二初結縁一。若不二結縁一者。今明二王子結縁之後中間逢値一。何列二異人一。答。三類並是王子結縁。故此疏中並依二経文一明二此三人一。経云（中略）又云二汝等諸比丘。此通二三一及我滅度後未来世中声聞弟子。乃至彼土得レ聞等一。是第三類方始受レ大。乃至滅後得レ道者也。[19]

これによると、第一・二類とともに、第三類もまた釈迦菩薩の結縁の者であると位置づけている。また次下には、この第三類の釈迦菩薩との結縁に関し、次のような説示が見られる。

而云二未曾聞大一者。雖レ聞不レ信。亦不二発心一。故属二不聞一。玄第六云（中略、⑥の箇所の略抄）。略抄彼明二二類一。初服レ薬者即是今初二類。次失レ心者是今第三。彼明三中間結二四教縁一。今但論レ小。又彼明二中間得度一。今亦不レ論。既云二与レ薬。故知聞レ経而云レ不レ服。故知不レ信。以レ不レ信故不レ名二結縁一。亦名二不聞一。以二今経文発菩提心一名二結縁一故。若泛論レ之。逆順一句亦是結縁。五百疏明。重酔不レ覚軽酔微覚。倶成二繋珠一如二毒鼓一耳。記云初是無レ識。但如二法師常不軽等一。或一句結縁。上已彼重酔人即是第三。亦名二元住小一。即法華論四声聞

中退大摂也。彼疏雖二不覚一亦名二結縁一也。[20]

すなわち、第三類が「未曾聞大」（『文句記』③）とされるのは、大通時に法華経を聞くがこれを信受せず、また発心しないため、法華経を聞かなかった「不聞」の者と位置づけられるとしている。また「失心者」「不失心者」に関する『玄義』⑥の箇所を略抄し、第一・二類を「不失心者」、第三類を「失心者」に配当している。第三類は良薬を与えられるも服用しないように、法華経を聞いても信受しない者である。つまり、信受しないため結縁と名づけず、「不聞」と位置づけられるのであり、これは『法華経』では発菩提心をもって結縁とするためであるという。しかし妙楽の『法華五百問論』には、ひろく論ずれば順縁・逆縁・一字一句等のわずかな聞法も結縁となると明かされている。また『文句』（⑧）には重酔・軽酔ともに毒鼓の如く逆縁をなしたとする説示、『文句記』には衆生が気づかなくとも、常不軽の如く逆縁、或いは一句結縁をなすとする説示がある。証真は以上から、彼の「繋珠喩」における重酔者は第三類であり、「不覚」であっても大通時の結縁として位置づけることができると説示している。

おわりに

以上、『注法華経』注記の天台等の釈文から、聖人の「大通結縁の第三類」の解釈を検討してきた。この第三類における結縁とは、下種益である法華経との結縁という点では、釈尊在世における在世下種に求められる。ただし逆縁を結縁とするならば、大通時の法華覆講に背いた時点に求めることも可能であると思われる。[21]

したがって、「第三類の在世をもれた」と認識される末法の衆生とは、久遠下種を忘失した「失心者」であり、それ以後大通時・釈尊在世を含め大化に背き続けてきた「未曾聞大」の者と位置づけることができよう。これは『開目抄』の所説に符合しており、更に『曽谷入道殿許御書』所説の「本未有善」の機であると思考される。[22]

注

（1）「第三類」、「釈尊在世の結縁」に関する叙述は、『唱法華題目鈔』（定遺一八五～一八六頁、朝師本録内写本）、『観心本尊抄』（定遺七〇五、七一三～七一四頁A）『顕仏未来記』（定遺七四〇頁B）、『小乗大乗分別鈔』（定遺七七七～七七八頁C）、『曽谷入道殿許御書』（定遺八九六～八九七

頁A）等に見られる。

（2）日蓮聖人は末法を下種の時と定め、末法の衆生に仏種を植えんと志向された。これは末法の衆生を仏種を有さない存在として把捉されたからにほかならない。この理由として、遺文においては二通りの説示が見られる。一に、一切衆生は久遠下種・大通結縁の者であるが、中間に悪知識にあい仏法を退転したため、仏種を忘失して三五塵点劫を経歴し今日に至ったという説示。二に、末法の衆生は全く過去に下種を受けていない者（本未有善）であるとする説示（渡辺宝陽監修、小松邦彰・田村完爾編著『傍訳日蓮聖人御遺文観心本尊抄』〔二〇〇二年・四季社〕三二五頁参照）である。これまで、この二通りの説示を会通しようと様々な解釈がなされてきた。その中で「大通結縁の第三類」を中心に論じられたものは、管見の限りあまりないように思われる。

（3）山中喜八編著『定本注法華経』上巻二三〇～二三一頁。なお①～⑧等の番号及びその下の出典名、並びに本文中の傍線は筆者による。

（4）『大正新修大蔵経』（以下『正蔵』と略す）第三四巻九九頁c、『天台大師全集』（以下『天全』と略す）「法華文句四」一六九七頁。なお『注法華経』の注記と『正蔵』との間には相違が見られる。「第一明二昔日同共結縁一」「第三明三今還於二法華一」は、『正蔵』では「第一明二昔日共結縁一」「第三明三今還説二法華一」である。

（5）『正蔵』第三四巻九九頁c～一〇〇頁a、『天全』「法華文句四」一六九八頁。なお「仏告二比丘一是十六下」は、『正蔵』では「仏告二諸比丘一是十六下」である。

（6）『正蔵』第三四巻二九八頁b、『天全』「法華文句四」一六九八頁。なお「自望下元初結二縁一者上耳」は、『正蔵』では「自望下元初結二小縁一者上耳」である。

（7）『正蔵』第三三巻六八四頁a、『天全』「法華玄義一」二一六頁。

（8）『正蔵』第三三巻八二五頁c、『天全』「法華玄義一」二一七頁。

（9）『定本注法華経』上巻二四二～二四三頁。

（10）宝地坊証真（生没年未詳）の『法華玄義私記』、慧澄癡空（一七八〇―一八六二）の『法華玄義釈籤講義』には、「喜根」は誤りで「勝意」であるとの指摘がある（『天全』「法華玄義四」一八〇頁）。

（11）『正蔵』第三三巻七五五頁c、『天全』「法華玄義四」一七七～一八一頁。なお「説二妙法花一得レ結二大乗文字一」「或生二通教結縁一説二無生之法一」は、『正蔵』では「説二妙法花一得レ結二大乗父子一」「或作二通教結縁一説二無生之法一」である。

（12）『正蔵』第三三巻九一一頁a、『天全』「法華玄義四」一七八頁。

（13）『定本注法華経』上巻二五一～二五四頁。

（14）『正蔵』第三四巻一〇六頁c、『天全』「法華文句四」一

八〇〇頁。

(15) 日蓮宗事典刊行会編『日蓮宗事典』〔一九八一年・日蓮宗宗務院・東京堂出版〕三五四頁参照。

(16) 『正蔵』第三四巻一〇六頁c、『天全』「法華文句四」一八〇〇頁。

(17) 茂田井教亨述『開目抄講讃』上巻〔一九七七年・山喜房仏書林〕一六四頁参照。

(18) 『法華玄義』巻六下では、「遠益者。即大通仏所十六王子。助レ化宣揚。双撃二毒天二鼓一。善生有二浅深一。惑死有二奢促一。始人天善。終至二大樹一浅益也。始初心最実。終後心最実深益也。始破二不善一。終破二塵沙一奢死也。始破二無明一。終亦破二無明一促死也。死之奢促是毒鼓之力。善生浅深天鼓之力」(『正蔵』第三十三巻七五八頁b。『天全』「法華玄義四」二二七〜二二八頁)、また『法華玄義』巻七上では、「近利益者。起二於寂滅道場一。始成二正覚一。即転二法輪一。撃二於毒鼓天鼓一。利二益衆生一。斉下至二法華一已前上。益亦浅深。死亦奢促」(『正蔵』第三十三巻七六一頁c。『天全』「法華玄義四」二八九頁)とある。これは迹門十妙中の「功徳利益妙」の箇所である。大通智勝仏時から今番釈尊の出世までの間の利益を「遠益」、釈尊が出世し『華厳経』の説法から『法華経』の説法までの間の利益を「近益」として説示している。天台大師は、仏の施化において惑を死せしむるを「毒鼓」、善を生ぜしめるを「天鼓」に譬え、さらにその利益に浅深遅速の不同があると説述されている。ここでは、大通時・在世時ともに、仏の説法を「毒天二鼓」としている点に着目されよう。

(19) 『大日本仏教全書』(以下『仏全』と略す)第二二巻六三〇頁下〜六三一頁上、『天全』「法華文句四」一六九九頁。

(20) 『仏全』第二二巻六三一頁上〜六三一頁下、『天全』「法華文句四」一六九九頁。

(21) 天台大師は『法華玄義』巻二上にて「如来洞達究二十法底一尽二十法辺一。明識二衆生種非種芽未芽。熟不熟。可度脱不可度脱一。如レ実知レ之。無レ有二錯謬一」(『正蔵』第三三巻六九四頁a、『天全』「法華玄義一」五二五頁)とて、三益中種益と熟益の間に、仏種の芽・未芽の状態が衆生にあることを説示している。これを受け妙楽大師は、『玄義釈籤』にて扶釈し「種芽等者皆以二二法一為二種熟脱一故也。聞レ法為レ種。発心為レ芽。在レ賢如レ熟入レ聖如レ脱」(『正蔵』第三三巻八四〇頁b、『天全』「法華玄義一」五二六頁)とて、聞法を種、発心を芽としている。すなわち、妙楽は聞法に種益の義を認めていると看取される。

ところで、この種芽等について『法華玄義私記』『法華玄義釈籤講義』『法華玄義釈籤講述』においては、扶釈がみられない。しかし、④⑤を扶釈する箇所において、下種、結縁、種芽等に関する説示が見られる。宝地坊証真は『玄義私記』において「泛言二下種及結縁一者同是一事。若別論者聞法名二下種一。是了因種故。発心名二結縁一。是仏果縁故。籤二云。聞法為レ種。発心為レ芽云云。或以二聞法一名二結縁一。

是微縁故。発心名二下種一。是仏種子故」（『仏全』第二一巻二八頁上、『天全』「法華玄義一」二一八頁）とて、ひろく言えば下種・結縁は同じくこれ一事である。しかし別して論ずれば、先の妙楽大師の『釈籤』所説の如く、聞法を下種、発心を結縁とする説。或いは、聞法を結縁、発心を下種とする説の二説があるとしている。

また慧澄癡空は『玄義釈籤講義』において「於二一八教中一随二時宜一円聞薫二蔵識一。成下当レ破二無明一功能上為二成仏種一。偏聞薫習為二調停種一。一化中下二両種一云二巧為一。然此二種不三必論二前後一」（『天全』「法華玄義一」二一八頁）とて、円教を聞法して蔵識に薫習し、無明を破すべき効能を成ずることを成仏の種と規定している。すなわち、単なる聞法は下種とならないとしているように見受けられる。

また大宝守脱（一八〇四―一八八四）は『玄義釈籤講述』において、「弁下親生下種与二泛爾聞法結縁一異上者。謂下二解性於第八識一。名二之下種一。如下耳歴二法音一不レ解中其義上者但名二泛爾聞法一。未二是親生下種一。当レ知。下種必結縁。結縁未二必下種一」（『天全』「法華玄義一」二二〇頁）とて、親生の下種と泛爾の聞法結縁との違いを弁別している。聞法により解性を第八識に下すことを下種、聞法してもその義を解さぬ場合を、泛爾の聞法結縁としている。

一方『日蓮宗事典』では、毒鼓の縁による無意識の聞法にも一応下種を認めるも、信仰上からは信心領納を下種とするとしている（四〇八頁参照）。

(22)「本」と久遠下種の解釈、並びに仏性論等については、今後の課題としたい。